

入選 埼玉県 小松崎 有美 様 (30 代 女性)

三年前、私がちょうどうつ病で休職していた時のことである。近所のメンタルクリニックに行くところかで見たとのことのある顔がいた。高校の同級生である。当時は頻繁に家に遊びに行くほどの仲だったが彼女が地方の大学に進学してから疎遠になっていた。私は偶然の再会に驚いた。しかしそれ以上に驚いたのは彼女がガリガリに痩せていたことであった。ここはメンタルクリニック。もしかしたら何かあったのかもしれない。そうは言っても自分もうつ病で、できることなら隠したいと思った。だから聞けなかった。ここまでタクシーで行き来していると聞いて、私が送ることになった。その車内で彼女から口を開いた。「主人が事故にあって」「えっ、あ、そうなの。大丈夫？」そう言った瞬間私はハッとした。彼女が泣きだしたのだ。まずいと思った。聞くところによるとご主人は三ヶ月前に亡くなっていた。それまで専業主婦としてご主人と生活していた彼女は突然孤独な世界に追いやられてしまった。痩せこけた身体に、やつれた表情、それも無理はない。ただそれ以上に私は心配なことがあった。生活はどうしているのだろうか、お金は大丈夫なのだろうか。そのとき聞けなかった私はインターネットで「遺族年金」というものがあるのを知った。彼女が貰っているのなら、ひとまずは安心だ。そう思っていた。しかし彼女からの深夜の電話で彼女は遺族年金の申請をしていないことがわかった。なぜか。その理由は意外なものだった。様々な手続きをするなかで死別という現実をつきつけられ、悲しい記憶がよみがえると言うのだ。事故死か病死かそれを聞かれるだけでもつらいと言う。そうは言ってもこのままでは彼女の生活が心配である。私は年金事務所に問い合わせた。すると身寄りのない彼女の場合、代行サービスや代理人による申請も可能なことがわかった。結局私が代理人となって手続きをした。彼女は委任状を書いてくれた。受給も始まった。ただ、お金が入ってきたからと言って、ご主人を亡くした傷が癒えるわけではなかった。彼女はやがて腰の痛みから起き上がれなくなった。強いストレスによるものだった。さらに「生きていても仕方がない」と度々口にするようになった。その症状は夜になると強く出た。睡眠薬を過剰摂取したり、泣きな

がら私に電話をしてくることもあった。私が慌ててかけつけると部屋は散らかりっぱなしで髪の毛はボサボサ、数日前と同じ服装の彼女がいた。こんな時ご主人がいたらと、何度も思ったし、近くにいても何もできない苛立ちもあった。ただそこにいるだけしかできない歯がゆさもあった。出口の見えないトンネルにいつそのこと一緒に消えてしまおうかとも思った。

そんな私を見かねた母が市の保健センターに相談に行ったらと言った。自分のことと彼女のこと。お互いにつぶれないようにするために。そこでは死別家族のための自助グループや精神疾患の患者の会などがあると教えてくれた。さらに彼女の場合、障害年金が受給できるとも。ただ、金額的なところで遺族年金の方を選んだが、行政の支援がこんなにも手厚いとは思ってもしなかった。

そんな彼女の気持ちがようやく上向きになったのが一年後くらいだった。暖かくなってきて、ほんの少しではあるが外を歩けるようになった。こうして彼女は一步步前へ進もうとしていた。時に彼女は「もっと優しくしておけば良かったかな」とこれまで口にする事のなかったご主人への想いを話すこともあった。そしてようやく今、パートを始めようと動き出した。

私は彼女とこうして関わり、年金について学ぶ機会を得た。年金は定年後に貰うものだとはばかり思っていた。働き盛りの三十代にとってそれは身近なものには感じられなかった。明日の仕事、明日の生活で頭はいっぱいである。そもそも私たちは当たり前のように明日がくるように思っている。でもそれは違うのだ。いきなり働けなくなることだってある。突然大切なひとを失うことだってある。明日何が起きるかわからない。そう考えると怖くなる。

でも、見えない明日を見えるかたちで支えてくれるものがある。それが年金だ。今回の件で私はそう気づいた。年金があったから、彼女は生活が続けることができた。時間はかかっても人生をあきらめずに前を向くことができた。年金という制度が続くこと、そして私たちが払い続けることには深い価値がある。「年金は国がやっているから大丈夫」と言葉の意味が今やっとわかった。

「じゃあ、また明日」

この言葉は年金があるからこそ、強く明るく言えるような気がする。